

日常言語に現象的意識を指す語はあるか：コーパスと大規模言語モデルを用いた実験哲学の拡張

篠崎 大河 (Taiga Shinozaki)^{1,2}・綿引 周 (Amane Watahiki)²・土井 智暉 (Tomoki Doi)^{2,3}・谷中 瞳 (Hitomi Yanaka)^{2,3}

¹慶應義塾大学・²東京大学・³理化学研究所

意識の哲学においてはしばしば、現象的意識の概念は、特定の形而上学的理論によって導入されるようなものではなく、むしろ日常的なものと仮定されている。この仮定は、現象的意識が実在するという主張である現象実在論を支持する一つの動機となっている。本発表は、コーパスと大規模言語モデル(LLM)を用いた実験哲学的手法を用いてこの仮定のもっともらしさを評価する。結論として、現象的意識の概念は日常的ではない可能性が高いと論じる。また以上の成果を通して、LLMを用いた新たな実験哲学的手法の有用性を示す。

現象実在論の支持者によると、現象的意識は、特定の理論によって措定されるようなものではなく、むしろその存在が自明なものであるとされる。このような哲学者の直観は、現象実在論を支持する動機の一つになっていると考えられる。この直観は特定の哲学的理論を支持することに先立って認められるべきデータであると仮定される。

もしこの仮定が正しいとすると、哲学に精通していない素人にも、現象的意識が実在するという直観が共有されていると想定することは自然である。実際、英語圏の意識の哲学においては現象的意識の概念は日常的な概念であると想定される。その根拠としては、日常言語(英語)において現象的意識を表す語彙が存在するように思われることが挙げられる。もちろん、‘phenomenal consciousness’(現象的意識)という語は哲学の専門用語であり、日常的表現ではない。しかし、哲学的文脈において‘phenomenal consciousness’と置換可能な語として用いられる、‘experience’(経験)や‘what it is like’(どのようなことか・どんな感じか)といった語は、英語の日常的な文脈においても用いられる。そして、何人かの哲学者は、それらの表現が、日常的な文脈においても現象的意識を意味すると考えている。例えば、‘experience’について Schwitzgebel は「通常の英語において、それはしばしば現象的意識を指示する」と述べ(Schwitzgebel, 2016, p. 227)、また、‘what it is like’について、Farrell は「哲学者が用いるいわゆる専門的用法とされるものは、非哲学者が用いる非専門的用法と同じ意味であり、どちらも全く専門用語ではない」と主張する(Farrell, 2016, p. 58)。

しかし、このような主張に対して近年、実験哲学者から反論が寄せられている。実験哲学とは、実験的な手法を用いて哲学的議論に貢献することを意図する領域である。日常言語において現象的意識を意味するとされる語が実際にそうなのか、という問いに対して、実験哲学者は、日常言語を収録した大規模コーパスにおける語の用法の分布を調査することによって答えを与えることを試みる。例えば Sytsma & Fischer (2023)は、

日常言語コーパスにおける‘experience’の用法の分布を調査し、そこにおいて心的状態を意味する用法はほとんど見られないことから、現象的意識の概念が素人にも共有されているという仮定に疑義を呈している。同様に、Wyrwa (2025)は‘what it is like’の用法の分布を調査し、現象的意識を意味する用法がほぼ見られないことから、それが専門的用法ではないという Farrell の主張を否定している。以上のような日常言語コーパスを用いた研究の利点として、i) それが哲学者の直観から独立した知見をもたらし、ii) 思考実験のような不自然な文脈がほぼないため生態学的な妥当性を持つということが挙げられる(Caton, 2020)。それゆえ、実験が適切に行われるなら、従来の哲学者の主張に対する反駁として十分な説得力を持つ可能性がある。

しかし、以上の先行研究には二つの問題点がある。第一に、以上の研究は調査の過程で、調査対象の文に含まれる特定の語(‘experience’, ‘what it is like’)が、どのような意味で用いられているかを分類しているが、分類作業は著者ら自身によって行われており、分類に著者らの特定の仮説への支持が影響している可能性がある。第二に、分類を人力で行う以上、多くの標本を扱うことができない。実際、先行研究において調査対象となった文は、各語、各条件につき 100 件程度である(Sytsma & Fischer, 2023; Wyrwa, 2025)。したがって、先行研究の結果は、日常言語における現象的意識を意味する語彙の有無に関して決定的な結論を出すものとは言えない。

以上の問題を解決するため、本研究では、LLM を用いたコーパス実験哲学の手法を提案する。LLM とは、膨大なテキストデータを学習することで構築された、様々な言語処理を行うモデルである。それは、実験者に対して中立であり、かつ、大量の文について分類作業を行えるため先行研究と同様の実験を大規模に行うことができる。本研究では LLM を用いて Sytsma & Fischer (2023)および Wyrwa (2025)と同様の調査を、約 10 倍の規模で実施した(各語、各条件ごとに 1000 件程度の標本を使用)。結果として、Sytsma & Fischer (2023)の結果は再現された。他方、Wyrwa (2025)の結果はおおむね再現されたものの、一部異なる結果が見られ、解釈の余地を残すものであった。しかし、いずれの結果も、現象的意識の概念が日常言語に含まれるという従来の仮定に疑義を呈し、現象実在論の動機の一部を減じるものである。また、以上の実践を通して、本発表では LLM とコーパスを用いた新たな実験哲学的手法の有用性を示す。

- Caton, J. (2020). Using linguistic corpora as a philosophical tool. *Metaphilosophy*, 51(1), 51–70.
- Farrell, J. (2016). “What it is like” talk is not technical talk. *Journal of Consciousness Studies*, 23(9–10), 50–65.
- Schwitzgebel, E. (2016). Phenomenal consciousness, defined and defended as innocently as I can manage. *Journal of Consciousness Studies*, 23(11–12), 224–235.
- Sytsma, J., & Fischer, E. (2023). ‘Experience’, ordinary and philosophical: A corpus study. *Synthese*, 201(6), 210.
- Wyrwa, M. (2025). A more ordinary ordinary view of the “what it is like”-talk. *Philosophia*.